

## コロナの終わり

日本鋼管病院 祝田 靖

(65 回生 腎臓内科)

新型コロナウイルスによる感染拡大から3年が経とうとしています。

この間、社会生活や医療体制への影響は多大であり、皆さんも今もなおコロナと戦っている真っ最中と思います。

当初、新型コロナウイルスが発生した時に、100年前のスペイン風邪の流行が話題になりました。スペイン風邪は1918年から1920年にかけて世界中で大流行し、当時の世界人口の約3分の1にあたる5億人が感染し、2,000万から4,500万人の命を奪いました。日本でも3回の流行があり、当時の総人口5,600万人に対して約45万人が亡くなり、死亡率は0.8%でした。

100年前にはウイルスの存在さえ知られていなかったのに対して、現代に起こったCOVID-19は病原体が新型コロナウイルスであること、感染経路は飛沫感染、接触感染、エアロゾル感染があることが知られ、スーパーコンピュータを使ったシミュレーションにより飛沫対策や有効な換気方法が示されました。一方

で我々が取るべき予防策はマスクの着用であったり、人との接触を避けるなど  
スペイン風邪の時代に言われていたことが引き続き推奨されました。



そんな中で、現代において感染の収束を早める手段として有望視されたのがワクチンと抗ウイルス薬の開発です。これらが武器となりスペイン風邪で3年かかった感染拡大の収束がより早期に達成されることが期待されました。

しかしながら、COVID-19の発生から3年経った今でも、感染の波は繰り返し起きており、未だコロナに翻弄される日常があります。これはコロナの変異株の出現が次々に起きていることとその伝播が全世界に行き渡るスピードが速くなっていることが関係しているようです。ワクチンは感染予防や重症化予防に一定の効果はあったと思われていますが、変異株の出現に追いつけなかったり、効果

の持続に限界があるようです。

また、抗ウイルス薬も感染予防に対する効果が確実なものは未だ現れず、感染収束の決定打になるまでは至っておりません。

100年前に猛威を振るったスペイン風邪でしたが、感染割合、死亡割合ともに最も多い年齢層は21歳から40歳の青年層で感染が35%弱、死亡が40%弱とほぼ4割を占めていました。これは当時の大正時代の日本社会の中核を担う層でした。これに続いて多かったのが20歳以下の層で、若年青年層を合わせて感染者ならびに死者全体の8割弱を占めていました。

一方、現状ではCOVID-19の感染者のうち20代以下の占める割合が約4割、30-40代で約3割を占め、感染者は若年青年層に多く見られます。感染者に対する60代以上の割合は17.4%となっていますが、死亡者は60代以上が97.0%を占めています。

100年前の1920年の日本の平均寿命は男性が39.7歳、女性が40.4歳でした。そもそも高齢者といえる人は多くなく、スペイン風邪の影響も若年壮年層に強く出て、3年後には自然とおさまりました。

現在のCOVID-19もオミクロン株になり若年中年層は感染しても重症化や死

亡することは少なくなっています。

今後もコロナは変異を繰り返しながら、感染の波を作っていくものの社会生活の維持を担う世代への重症感染症としての影響は少なくなっています。100年前の社会なら現時点でコロナは収束に向かったと言っているかもしれません。

100年前と違うのは高齢化社会が進んでいることです。高齢者は元々肺炎やインフルエンザで亡くなる方が多かったのですが、ここにコロナが入りました。今や入院患者の多く、そして亡くなる方のほとんどを高齢者が占めています。高齢者についてはコロナは今まで同様の脅威であり十分な対策が必要です。しかし、それ以外の年代については完全な感染予防を目指した過度な自粛、日常生活を制限するような対応は終わりとしたところです。

3年間に及ぶ自粛生活、行動制限、マスク生活は今や体に染み付いています。特に医療従事者はいまだに強い行動制限を強いられています。かつて普通に行われていた病院職員での歓迎会や忘年会、新年会もまだまだおこなえていません。このため、新しい職員との交流ができないばかりか、マスクを外した素顔さえ知らない仲間が増えてしまいました。今年は久しぶりに帰省した人も多かったと思いますが、今後は自由に国内旅行や海外旅行に行きたいものです。そして、

万一感染しても後ろ指を刺されるような雰囲気は無くしていきたいです。

コロナの感染自体は今後もなくなることはありません。高齢者への十分な対策と院内での感染防止は引き続き万全を期すべきです。ただ、本来の日常生活を取り戻す時期がそろそろ来ています。

コロナの終わりを決めるのは、感染者数の変遷や法律上の分類ではなく、高齢化社会を迎えた我々のコロナに接する捉え方次第といったところでしょうか。

リレーエッセイですが、次のバトンは先輩である山口佳寿博先生にお願いしたいと思います。山口先生は学生時代、研修医時代に教をいただいております。そして今も私の所属する日本鋼管病院の外来部門であるこうかんクリニックで毎週、外来を担当していただきお世話になっております。

山口先生よろしく申し上げます。